

検疫上注目される病害虫の解説

カンキツかいよう病

学名：*Xanthomonas citri* subsp. *citri*

英名：citrus canker

本病は、カンキツ栽培における重要な細菌病の1つで、日本を含め世界で広く発生している。本病原は、病原性の違いにより5群に類別されていた *X. campestris* pv. *citri* の中で最も病原性の強いA群が2006年に別種として提案されたものである。他の4群(B群～E群)に類別されていた類似菌は日本未発生である。植物検疫では、米国向け輸出うんしゅうみかんの輸出条件として、果実の表面殺菌等が必要である。

分布地域：アジア、南アメリカ、オセアニア、アメリカ(フロリダ州)

宿主植物：カンキツ属とカラタチ属を含む様々なミカン科植物

病徴：葉、枝、果実に発生。葉でははじめ、円形、径0.3～0.5mm程の盛り上がった水浸状小斑点を形成する。病斑の拡大に伴い、中心部に褐色の壊死部を形成し崩壊した組織の細胞壁残渣がリグニン化しコルク状となる。やがて病斑部の周囲は黄化する。

病原菌の形態：1.0～2.0×0.5～0.7 μm、短桿状のグラム陰性細菌。単極毛をもち運動性を有する。PSA(Potato semi-synthetic agar)培地等では本属特有の黄色で粘性を帯びた集落を形成する。生育適温は20～30℃。風雨により伝搬する。新梢及び果実の未成熟期には気孔から侵入し、成熟期では傷口感染する。春梢への伝染源は主に枝の越冬病斑である。

識別：PCR法その他、本菌に特異的なバクテリオファージによる識別が可能であるが、変異株に注意が必要である。

防除：無発生地域では、無病苗の利用及び罹病株の早期発見による抜取りが有効である。発生地域では、品種の抵抗性の程度を勘案しつつ、罹病枝の切除及び風雨対策といった被害軽減のための管理が重要である。



葉裏の症状・病斑(タイ産コブミカン)

ケブカトラカミキリ

学名：*Hirticlytus comosus* (Matsushita)

英名：—

本種はトラカミキリ族に属する1属1種の日本固有種である。本種は幼虫が耕地防風垣等のイヌマキを食害し、樹勢低下や枯死を引き起こすため鹿児島県において大きな問題となっており、2009年頃から千葉県でも被害が確認されている。また、中国向けイヌマキについては本種の寄生がないことが求められており、注意が必要である。

分布地域：九州南部、高知県南部、千葉県東部

寄主植物：イヌマキ、ナギ

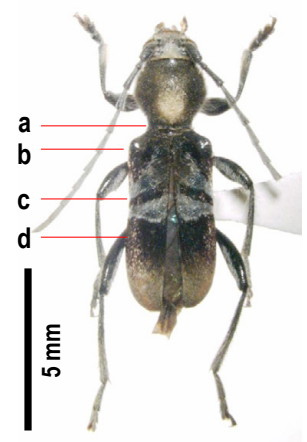
形態：成虫は体長8～14mm。体全体が白色～淡褐色の直立長毛で覆われる。幼虫は無脚で頭部は黄褐色、胸部、腹部は乳白色で扁平。

生態・被害：成虫は4～7月に生木に産卵。幼虫は材の内部を食害し10月に材内で蛹化・羽化して成虫で越冬、4～6月に材から脱出する。幼虫は樹皮下をリング状に食害するので、寄主は食害部から上部が枯死し樹勢が低下、数年で枯死する。

防除：加害の状況は、幼虫の食害により樹幹がハチマキ状に盛り上がることで、部分的な枝枯れ、直径3～4mmの成虫脱出口により発見できる。

材内の虫を防除する手段は確立されていないが、防除は被害木の伐採・焼却や成虫脱出期における薬剤の樹幹散布が効果的である。薬剤はMEP乳剤、またはエトフェンプロックスマイクロカプセル剤が有効とされている。

また、予防策として、寄主の移入・移出には被害木の混入がないかどうかを注意し、被害の拡大を未然に防止する。千葉県の発生市町では、広報などで広く周知して地域ぐるみでの発見、防除を行っている。



成虫背面

前胸と上翅の間が強くくびれる(a)上翅は基部が黒色(b)、細い黒色帯(c)後縁の境界が不明瞭な黒色横帯がある(d)